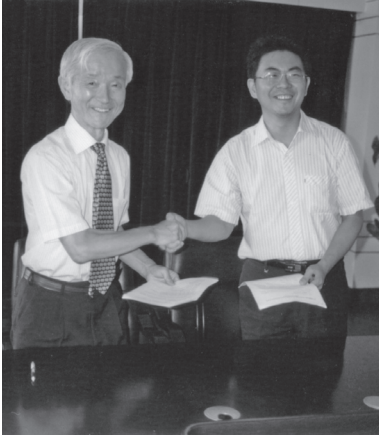


新疆ウイグル自治区雑感

野 副 伸 一

初めに

筆者は今年(二〇一一年)の八月十四日(日)から二十一日(日)の八日間、新疆ウイグル自治区を訪問した。この新疆訪問は、亜細亜大学アジア研究所の研究プロジェクト「北東アジアの経済・社会の変容と適応」(主査 西澤正樹教授)の研究活動の一環として推進されたものである。それと同時に、一九八六年の「交流協定」締結以来、学術交流関係のあった亜細亜大学と新疆财经大学との関係を一層発展させるべく「共同調査研究」を立ち上げる目的もあった。



写真：共同調査研究協定の交換
(右：高志鋼経済学院院长)

筆者を含め、日本からの五人は全て新疆訪問が初めてであり、八日間の新疆旅行は極めて刺激に満ちたものであった。特に筆者にとっては、新疆は自分の担当地域とは遠い場所であり、定年を間近に控えた身にとってハードスケジュールを持ち堪えられなかろうかの不安もあった。しかし新疆への強い好奇心は、そういった疑問や不安を圧倒していたと言わなければならない。筆者はむしろ絶好のチャンスと判断し、参加した。以下、短期間の旅行で見聞したこと、感じたこと等を書き連ねてみたいと思う。

東京―北京間より遠い 北京―ウルムチ間?

まず、新疆ウイグル自治区について、大雑把に紹介してみたい。中国の西のほうにはある新疆は嘗て西域と呼ばれた。筆者が中学校時代に覚えた王維の有名な漢詩には、「西出陽関無故人(西陽関を出ずれば故人無からん)」というものがあり、新疆は漢族にとって異民族の支配する地域であった。正にシルクロードの舞台でもあった。

新疆の面積は約一六六万平方km(日本の約四・五倍)と広く、中国全体面積の六分の一を占め、最大の行政区となっている。筆者は羽田から北京経由で新疆の省都ウルムチを往復するのに中国国際航空(CA)を使ったが、興味深いことに行きの羽田―北京間の所要時間が三時間五十分であったのに対し、北京―ウルムチ間は四時間十分であった。同じ飛行機会社でも国際線と国内線では飛行速度に多少の違いはあるものと思われるが、それにしても中国の領土の広さには改めて驚かされた。

北京からウルムチへの飛行機の旅は、大半が雲に覆われ、下が全く見えなかった。しかし到着一時間前頃から下が見え出し、雪を頂く山もある天山山脈が延々と続いていた。ウルムチに近づくにつれ緑が増えだしたのは印象深い。ウルムチはモンゴル語で「美しい牧場」という意味だが、今や二四〇万人の大都市に成長し、大きな工業団地が造成されていた。

筆者にとってウルムチで印象深かったのは、若者が他の省に出ないという話と、環境美化に力を入れていることであった。前者については、中央政府からの特別支援に加え、市が大きな工業団地を造成し、企業誘致に積極的であることの反映でもある。後者については道路網が整備され、道路周辺には街路樹が植えられ、花壇も整備され、散水車を何度か見かけたことである。ウルムチは今正に開発の最中であり、ダンプカーの往来が

頻繁であった。しかしそれにも拘らず、埃っぽさは感じられなかった。それだけ環境美化に力を入れているということである。

我々はウルムチでは、先ず新疆財經大學を訪問し、研究交流について話し合った。その後ウルムチ經濟技術開發区を訪問し、開發区の現状についてブリーフィングを受けた後、中糧コカコーラ、新疆牧神（農機具製造）、ウースビーール、ウイグル製菓、美克國際家具を見学した。

多様な人種構成

新疆の人口は現在二〇四二万と少ないが、人種構成が多様である点が興味深い。自治区全体では漢族が四十八%、ウイグル族が四十二%と多く、残り一〇%にカザフ族、回族、モンゴル族等の少数民族がいる（一九八二年にはウイグル族の比率は約七〇%であった）。省都ウルムチでは漢族が八十七%と圧倒的に多いが、南部のカシユガルやアクスではウイグル族の比率がそれぞれ九十五%、八十五%と高いという。

よく整備された道路網

我々は、ウルムチに二泊した後、マイクロバスで西に向かい、石河子（シーハズ）で一泊、博楽（ボーラ）で一泊、伊犁（イリ）で二泊し、そしてその日のうちにウルムチに戻るという、往復一四〇〇キロのバス旅行を強行した。このバス旅行で印象的なことは色々あるが、先ず高速道路や市内の道路網が

よく整備されていたことが挙げられる。唯一の例外は塞里木（サリム）湖から伊犁へ抜ける峠で、工事のため砂埃りが酷かった。塞里木湖は実に美しい湖で、湖水近くにパオが点在していた。対岸に「成吉思汗点将台」を地図上で見つけ、感銘深かった。

石河子は屯田兵が作った町

石河子は興味深い町である。中国が一九四九年に建国された後、進駐した第八農業兵団によって作られた町である。王震將軍の率いる兵団の進駐は、北辺の防備と農業振興（食糧の確保）を狙ったもので、正に兵団は屯田兵だったのである。新疆に山東省出身の人やその子孫が多いのは、兵団が山東省出身者で構成されていたためとも聞いたが、確認は出来なかった。軍壘博物館は石河子の歴史を詳細に紹介していた。我々は石河子でも經濟技術開發区を訪問し、現状についてブリーフィングを受けた後、伊利乳業、華興ガラス（ビールビン製造）を見学した。

厳しい検問

我々は石河子を後にし、カザフスタンとの国境である阿拉山口に向かった。途中塩水湖である艾比湖を右手に望んだ。中国にはまた水河によって出来た湖があることをガイドブックで読み、中国の地形・地質の多様さを感じた。阿拉山口に行くまでに二回の検問があり、それぞれ通過するのに時間がかった。結局税関を見学することは出来ず、みや

げ物店でカザフスタン製のチョコレートを買っただけにとどまった。チョコレートの入った赤いビニール袋には、どういう訳か「つとめ品」という日本語が書かれていた。ウルムチから北京への飛行機で乗り合わせた日本人旅行者によると「新疆南部では検問が厳しかった、どうもカシユガルとホータンの間で衝突があったらしい」とのことであった。

伊犁は昔から豊かな場所

我々が二泊した伊犁では、中央アジア系の美人を多く見かけた。伊犁は昔から地味が肥えていて、種を蒔くだけで作物が収穫できたため、周辺諸国から人が集まってきたという。そのため伊犁は清朝時代には新疆の中心地であったという。伊犁では百信草原蜂業、慶華煉化有限公司等を見学した。伊犁に隣接する伊寧県の高官の接待を受けた折、ウイグル人演奏家三人による歌と伝統楽器による演奏があったが、素晴らしかった。

終わりに

我々のウルムチ訪問は、高志剛經濟學院院長を始めとする新疆財經大學の関係者のご協力によるものであった。また地方旅行には日本語の堪能なジュライティ副教授とシユフライティ副教授が同行して下さった。今回の調査旅行は共同研究の先鞭をなすもので、実り豊かなものであった。改めて両先生のご協力に感謝申し上げます。

（のぞえしんいち・アジア研究所所長）